

「京都大学・北京大学 日本史研究国際討論会 参加報告書」

京都大学文学研究科博士後期課程1年 松井直人

①国際的な場で研究報告を行ったり、海外の研究者の討論を行うことに対し、もともと興味がありいつか経験してみたいとは考えていたが、実際は海外の研究者と問題の共有を図ったり、建設的な討議を行うことは非常にハードルの高い作業であろうと考えていた。だが、今回のプログラムに参加することでそのような認識は大きく変化した。すなわちこちらがそのような憂慮をするまでもなく、北京大学の研究者からは私の研究を的確に理解したコメントを得ることができ、また、自分の研究をより深めてゆく上で非常に重要な気付きを得ることもできたのである。このことは、こちらがしっかりとした準備を行えば、環境・言語が違うことは、有意義な討議のための必要条件と言うわけではないことを私に教えてくれる結果といえ、事前感じていた国際的な場での発表に対する恐怖心は相当に和らいだ。そして、今回の経験から今後また海外で自分の考えを述べてみたいと思えるようになった。今回は同じアジア人、また日本史学を学ぶものどうしという立場での討議であったが、次回はヨーロッパなど、他の文化圏に属する方々とも歴史学を通じた交流を行い、自らの研究をさらに深めてみたいと思った。

②今回のプログラムでは北京大学の構内に宿泊し、大学で日本史学を学ぶ方々とも積極的な交流を持つことができた。北京大学の学生の方と様々な交流を持つ中で、みな非常にたくましく学生生活・研究生生活を送られている印象を受け、日本とは違う生活環境に強い刺激を受けた。また、北京市内の主要な史跡・博物館（国家博物館・頤和園ほか）の踏査を行い、歴史文化への理解を大いに深めた。

③本プログラムは北京大学において日本史学を研究する学生・教員と京都大学文学研究科において日本史学を学ぶ学生との研究討論会である。はじめに、北京大学の側から主に日本近代史を中心とした3本の報告を受けた。内容は日清戦争期における軍費調達の方法とその評価について、明治初期の地租改正実施のプロセスについて、民法典論争の評価の再検討について、であった。これに対し京都大学の側はコメントを行い、個別の論点を共有するとともに質疑応答を行った。その後、日本側が主に前近代を中心とした報告を行った。内容は、摂関・院政期における貴族の鬪諍事件について、中世武家政権の地域支配について、中世京都と武士の関係について、近世大名の死と家臣団の殉死についてであった。その後同様に北京大学の側からコメントを受け付け、質疑応答を行った。北京大学の側は国家的な支配のあり方に注目する報告であったのに対し、京都大学側の報告は公家・武家といった社会集団の様相に迫ろうとするものであり、日本史を描く上での主体をどこに求めるのかに視点の違いが見受けられることが浮き彫りとなるかたちとなった。今後はこのような点を踏まえて議論を積み重ねることで、より建設的な議論が行えるようになると思われ、今後ますますの交流の活発化を約しつつ閉会した。

④今後筆者は日本史を専門とする歴史研究者となることを希望しているが、研究を報告や論文の形で発表する場としてこのような海外も視野に入れることで、自らの見識をより深めてゆける可能性を感じた。そのような機会があった場合、今後も積極的に行動を起こしてゆきたいと考えている。